

平成28年度第1回総合教育会議会議記録

1：日時 平成28年5月11日(水) 午後3時00分

2：場所 いの町役場本庁舎 401会議室

3：参加者

町長 塩田 始

【教育委員会】

委員長 山本 眞 壽

同職務代理 日向 國 雄

教育委員 渡辺 勝 喜

教育委員 山中 ゆかり

教育長 藤岡 孝 雄

【事務局】

総務課参事 岡村 寛 水

教育次長 山崎 泰 代

教育事務所長 川村 孝 子

事務局次長補佐 澁谷 幸 代

事務局次長補佐 松丸 博

事務局主監 乾 孝 治

教育特使 菊池 省 三

4：会議に付すべき議題：教育委員会の課題及び取り組みについて

1. いの町まち・ひと・しごと創生総合戦略について
2. 第2次教育振興基本計画策定事務について
3. その他

会議

岡村参事： ただいまより、平成 28 年度第 1 回いの町総合教育会議を開催いたします。

始めに教育委員さんの皆さんにお出ししている議案の 1 番と 2 番を入れ替えて進めさせていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

本日の会に菊池省三先生も参加させていただくことになっていますが、予定としましては 15 時半くらいになるということですので、ご連絡をさせていただきたいと思っております。本日は、午後 4 時を目途に進めさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは早速でございますが、本日の議題に入っていきたいと思っております。

第 2 次教育振興基本計画策定事務について教育委員会事務局渋谷次長補佐からご説明をお願いします。

渋谷補佐： 私の方から第 2 次教育振興基本計画策定の事務について説明させていただきます。お手元に参考資料を準備しておりますのでご確認をお願いします。参考資料 1 から 5 をクリップ止めになっているものをご準備ください。まず、参考資料 1 ですが、現在策定しておりますいの町教育振興基本計画は平成 28 年度までの計画となっておりますので、今年度中に平成 29 年度からの第 2 次の計画策定と考えているところでございます。計画の位置づけとしましては、国の第 2 期の教育振興基本計画及び第 2 期の高知県教育基本振興基本計画を参酌しまして、いの町第 2 期の振興計画、また、いの町子ども子育て支援事業計画との整合性を図りながら、本町が目指す教育の在り方基本理念基本目標を明確に表し、それらを確実に実現するために必要な教育施策や取組を体系別に整理した、いの町として策定する教育に関する基本的な計画でありまして、教育大綱と位置づけするものでございます。参考資料の下の方に図式化しております。計画の視点としましては 3 点ございまして、まず 1 点目は教育基本法第 17 条第 2 項に規定するいの町の教育の振興のための施策に関する基本的な計画、2 点目の町における教育分野に関する施策を総合的かつ体系的に構築する 5 年先を見据えた長期的な視点に立った計画、3 点目は、いの町の最上位計画である第 2 次振興計画の教育部門別計画となっております。計画期間は、平成 29 年度から平成 33 年度の 5 年となっております。策定主体はいの町教育委員会となっております。

続きまして、計画策定の体制についてご説明します。参考資料 2 をご準備ください。計画策定については、教育振興基本計画策定ワーキングチーム設置を要綱で設置しまして、事務局職員、吾北・本川教育事務所、教育支援センター、教育研究所、図書館、主任・教頭会、主監・教頭会・ほけん福祉課のメンバーで設置しておりまして、今のところ 17 名で行いたいと計画しております。部会としましては、学校教育部会、生涯学習部会、幼保支援部会、要保護児童対策部会、子育て支援部会で構成し、素案を

作成している町の教育振興基本計画検討委員会の方に提示し、ご協議いただき修正協議を加えていくような形で考えておりました、その後の町教育委員会に提示しまして意見を聴取していきたいと考えております。素案が固まった段階でパブリックコメントを平成28年12月頃に行いたいと考えております。体制については以上でございます。続きまして、資料5の方をお願いします。こちらが盛り込みたい基本計画の骨子で案をお示ししています。

(第1章から第5章を読み上げ)

これに基づき案を作成しお示しして、ご意見をいただきながら進めて参りたいと考えています。最後に、資料3と4により、スケジュールのご説明をさせていただきます。まずは、参考資料3の方ですけれども、1枚目が4月から10月までで2枚目が10月から3月までです。部門としまして、事務局、ワーキングチーム、検討委員会と分けまして示しています。まずは、事務局ですが、4月末までにワーキングチームのチーム員を決定下ところで、今、策定委員の2名程度ということで公募をかけたところです。公募委員は策定委員決定の検討委員会を開催し、委員を決定していきたいと考えています。それと並行しまして、ワーキングチーム会の招集通知を行います。日程については仮のものを入れてありますので予めご了承くださいようお願いします。6月からワーキングチームを開き、一回目の内容は、参考資料4のところに書かれていますとおり、いの町教育の現状と課題、骨子(案)検討をしたと考えています。その意見を事務局が集約します。そして、取りまとめたものを6月30日に予定しています検討委員会の方に諮ります。その後、ワーキングチームを検討委員会を交互に開催していくような形になってはいますが、具体的な施策等をじっくり7月8月をかけて、部会を開催しながら検討したいと思っています。そして、9月に策定委員会にかける等、順次策定に向けて進めたいと考えています。11月中旬くらいには、教育委員会にお諮りし、町長決裁を受けた後、総務文教常任委員会に報告して、パブリックコメントを12月に実施したいと考えています。パブコメのまとめをチーム員に報告して、最終的な素案作りに入っていきます。大体素案が固まりました2月中旬に教育総合会議に報告したいと考えています。最終3月議会への報告となります。私の方からは以上です。

岡村参事：一つ目の議題につきまして、事務局の方からの説明は終わりました。何かございませんでしょうか。

塩田町長：まず、教育振興基本計画が28年にできるわけですが、第2期に入る前に現状と課題と言うテーマで議論がされるわけですが、第1期の総括と言うのは無いですか。例えば第2期は数値目標も今の時期であれば入れていかなければならない。分かり易い数値目標で教育計画を練っていかなければならない。それであれば、第1次の総括が出てこなければなりません。いの町の振興計画であれば、5年で策定し、毎年ローリングさせているでしょう。あれは総括していつている。そういうところが無いと、計

画は直ぐに委員さんと事務局でパッと作れる。ただ、中身が有るか無いかといったところが私が懸念するところです。そこは、どのようにお考えでしょうか。

澁谷補佐：町長がおっしゃるように数値目標が明確になっていないということは考えておりまして、ただ、第1次の振興計画については、数値目標までを明確にしておりませんでしたので、今回第2次の計画では数値目標も盛り込みながら計画していきたいと考えています。

塩田町長：数値目標と言うのは、なかなか難しいところがあります。もっと、地方創生でするのは、もっと相手があったり、子どもさんの心があったりするのでも、それをするためには、第1次の総括は絶対必要。それが今回のワーキングチームとかに入ってきてないように思うが、それはどこかでやっているのか。

澁谷補佐：第1回目のワーキング会議の時に現状と課題の洗い出しも行う予定をしている。その時に第1次の計画に照らし合せて、今、こういう課題が残っているということを洗い出させていただくためにワーキングチームに意見をいただきたいと考えている。

塩田町長：そのスタートを間違えないようにお願いします。

澁谷補佐：はい、ありがとうございます。

岡村参事：他に教育委員さんからは無いでしょうか。

日向委員：この検討委員会は、今の計画の委員会は進捗状況の検討というのをされてはいるのでしょうか。自分たちが策定した計画がどのように進んでいるのか、その検討をされていきましたか。

澁谷補佐：進捗管理はしておりません。

日向委員：そしたら新しい策定委員会は、将来に向けて数値目標を作るのであれば、それがどの程度進捗しているのか、足りない部分はどこかというようなことはしていっていないと、今言われたように結果どうだったのかということにはなると思う。

澁谷補佐：新しい振興計画は1年毎に検証していきたいと考えております。

岡村参事：他にございませんでしょうか。

日向委員：1次の基本計画で進捗状況の検討委員会をしなかった。それは、総論として、そういう計画を立てていなかったということか。

山本委員長：進捗状況も分からない状況で第2次の計画の反省点など、何を根拠に資料に検討するのか。

塩田町長：現状というのを押さえて、振興計画の策定の時から5年間経って現状で前に進んでいるかいないか、多分そこの辺しかできないと思う。

山本委員長：5年間をざっくり見て、この点は良くなった、この点はマイナスになったよという大掴みしかできませんよね。1年サイクルとか、本当にどの部分がどのスピードで進んだのか、衰退しているのか、本当に細かいことが分からないままに第2次に取り組むのですね。

塩田町長：いの町では、高齢者福祉計画とか、障害者福祉計画とか、そういう計画を作る

のはとても上手なんです。ただ、それを検証しているのかどうか、特に教育委員会がリードして、2次に入る前に一時の総括をやっていただければ、ほけん福祉課もメンバーに入っているとお聞きしましたので、教育委員会から発信して他の計画も毎年毎年見直しをすべきですよという提言をしていただいたら、いの町全体が良くなる。いの町振興計画は毎年ローリングしているのですから。毎年というのはなかなか難しいかもしれませんが、何か、そういうところのお知恵を事務局の方にもお願いしたいです。

山崎次長：教育委員会の方では、検証作業として委員が毎年集まって行うということはしていなかったんですが、教育委員会としましては、これまでの進行計画には具体的な事業は盛り込まれていなかったの、教育要覧でありますとか、教育行政方針等において、毎年毎年見直しながら、今年はこれに取り組むといった具体的な事業、また、数値は現在これであるといったものは押さえていますので、次期教育振興基本計画を作る中では、これまでの5年間の推移というものはグラフ化とかはできるものと考えています。そこで、この5年間、1年1年は出来ていなかったとしても、この5年間の総括して見直すことはできるのではないかと考えます。

塩田町長：教育行政方針、あれも結構良いことを書いているけれども、実際には計画委員には分からない、事務局だけが分かっていることなので、それをオープンにしながら会議を進めていただいたらいいかと思います。

山本委員長：5年間の歩みについては数値的な報告は受けてませんが、確かに良い方向に進んだと思います。この1年半くらいは急速に2次に向けて意識してかなりのスピードで進んでいるという感触を受けている。これは勘違いではないと思う。

塩田町長：例えば、子育て支援、妊婦さんに母子手帳を交付してから保健師が全ての地域でマンツーマンで支援していきますよということは数値で目標ができると思う。そんな簡単な数値が出てくれば委員さんも分かり易いと思う。冒頭からすみません。渋谷補佐の説明を聞きながら、ピピッと来たことを申しました。

岡村参事：この議題につきましては、他にありませんでしょうか。それでは、2番目の議題に入りたいと思います。いの町まちひとしごと創生総合戦略についてでございます。説明事項につきましては、2段階で説明させていただきます。菊池学園の経過報告といったことで乾担当主監から説明させていただきます。

乾主監：私の方から菊池学園の経過報告をさせていただきます。まずいの町菊池「学園だより」ですがこれはホームページにも掲載させていただいております。4月3日から菊池省三先生を特使としての動きが始まっています。次のパワーポイントの5/10の資料をご覧ください。これは、活動の様子を簡単にまとめたものです。4月当初には、各学校に対して、この一年間どのように取り組んでいくのかといったことを話に行きました。1ページ目した、2ページ目裏面は、その時の様子です。なお、この菊池学園の取り組みは、PR映像作成とドキュメンタリー映画の撮影があります。3～

5 ページ目には、菊池学園の取り組みの一つである教師塾の様子です。4月21日寺子屋3日目は、46名の参加者がありました。この時は、テーマが子どものほめ方叱り方ということで、半数以上が保育園の保育士さんでした。いの町在住で四万十町教育委員会に勤務されている方も来られていました。6 ページ目からは、菊池先生が各学校を巡回されている菊池学級の様子です。伊野小学校で授業されている時の様子です。菊池先生の言葉がけ等により、子どもたちはこんなに熱心に白熱した様子が見られました。8 ページ目は、教室に入れない子どもさんもいたけれど、菊池先生にどうしても会いたいと言って廊下からずっと見ていて、菊池先生の絵を書き、先生から感謝の言葉をもって頭をなでてもらっているところです。今後の取組は、6月5日に菊池先生の学びの場ということで、間もなくホームページに公開して全国の方に呼びかけて開催します。100名を予定しています。地方創生ということで、産業経済課と連携して、いの町の観光 PR と菊池学園の取り組みを紹介します。6月に29日には、菊池先生のドキュメンタリー映画「挑む」は子育てには大変参考になると思いますが、実際子育てしているお母さんたちは子どもを連れて映画を見に行くことが困難であるので、そういったお母さんを対象としたぷっくりはあとママズシアターを開催します。以上が4月からの活動報告です。

岡村参事：はい、それでは、私の方から説明させていただきます。3枚目の資料です。いの町まちひとしごと創生総合戦略と菊池学園との関係といったことで、概要説明をさせていただきます。いわゆる総合戦略といわれるものは、まちひとしごと創生法という平成26年12月に施行されている法律に基づくものです。国の方からの目的・定義といったものはこの法律で定められています。市町村の方は、努力義務です。急速な少子高齢化に対応し、人口の減少に歯止めをかける、過度の集中の是正、地域で住みよい環境を作り、活力ある日本社会をつくる。といったところで人口減少という負の連鎖を断ち切るという流れを変えようというのが、地方創生の目的です。いの町は総合戦略を策定しています。平成28年度からの見直し作業にも入っています。平成27年度版のサイクルを回すということがございますので、懸賞を行ったうえで、28年度版の作成に入っているところです。何をやりたいのか、というと、それは好循環をもたらすためですので、人口移動の転出抑制策、人口移動の転入促進策、それに合わせて出生人口の増加策。これを町全体で同時に進めていく必要がある。これがミソである。総合戦略については色んな項目がある。要するに全体で取り組む必要がある。菊池学園の取り組みは、教育的目的が第一にあると思う。それはゆるぎないもの、実際に、教育委員会事務局でいろんな仕掛けするといったことは行っていただく。ですが、それはそれとして、そういったものの人材育成といった事業をやっていくと、町民の人材育成にもつながる。人口の好循環をもたらすといったところで言いますと、長期的な視点で、モチベーションを上げること、そういったことを力強くやっていくことで、種をまく。5年後、10年後で出生者が増える、というような大きな構想を立てている。これが、総合戦略。それと短期的

に言いますと、転出抑制策。いわゆる菊池学園の活動が、人を居続けさせる、転出抑制策につながってくる。そういったことが人口問題につながる政策ですよということである。それと、もう1点、間接的な人口減少問題で、移住等といったことが考えられますけれども、事業自体が魅力なんだと発信していく。この発信についてはいの町教育委員会は、なかなか難しいと思うので、移住施策とか、産業経済課が一体的に取り組んで居ますけれども、行政部門がそういったところをしっかりと受け止めていく。といったような政策連携をするといったところが、総合戦略のアクションプランである。それと今後、今、乾先生からお話しがありました菊池先生の講演のプログラムを全国に発信している。そして、全国から来た人に対していの町の他の部署がいの町の魅力を伝えていく。色んな所にいの町を見せるといった事を実施しようとしている。既に菊池道場の生徒がいの町に転入している。それから、寺子屋に参加していただいている元伊野小学校に勤務していて、現在転出している教員が6月にいの町に転入して、寺子屋に参加したいと言っている。徐々に広まっている。今後も教育委員会の職員と町長部局のそれぞれの職員同士の連携や情報共有などのミーティングを重ねながら取り組んでいきたい。といったところでございます。では菊池先生がお見えになりましたので、どうぞ、よろしくお願い致します。

菊池教育特使：こんにちは。改めて大きな役割をいただいているなと思います。今、いろんなところに発信をということでありましたけれども、私なりにできる範囲でやっております。実際に5月は北九州で寝たのが1ヶ月に一回だけだったと思います。多分5月はこのままで、いの町に居る方が長いだろうなと思います。色んな所でお話しさせていただいている中で、教育を核として地方創生というものに対して、教員の反響というのは、とても強いと思っている。実際に6月2日に乾先生の方からお話しがありました、学ぶ会にいの町に来て、発表しないかといたところで声をかけるんですが、ぜひにというような声をたくさん聞きます。すぐに移住にというのは難しいと思いますが、全国的にこの取り組みが私の関わりの中ではとても強いものと伝わってきております。この前の寺子屋に熊本の方から大学4年生がいのに行きたいから、高知で試験を受けると言ってきているわけですね。また、1週間後にもまた来たいと言っている。たまごセミナーで若い方たちをどんどん連れてくるというのが、見える形で、人口増につながるのかなと思います。伊野小学校の川口君もそうだし、それと同時に3月まで伊野小学校に勤めていて転勤になった先生もいの町に移住したいと言っている。この人も結局私との学びの場の中に居た人なんですよ。寺子屋で引き続き学びたいと。だから、私に与えていただいた環境の中で少しずつ、そういった反響を感じているところです。かといって、移住というのは、距離を感じるころはあります。いの町の教育といったところを先生方と学び合っ変えていきたい。全国的にいろんなところに行って、教師の意識を変えるとといったところが一番の目的でもあり、一番難しいところでもあるというのが正直な気持ちです。子どもたちが教室に集まって、私もよく言っていたんですが、2：

6 : 2 だと。考える子が 2 割で普通の子が 6 割で、気になる子どもが 2 割居る。それで 2 : 6 : 2 になり、一年がスタートする。真ん中のどっちにでもつきそうな人を、上の 2 に入れて 8 : 2 にして 8 からもっと力をつけた者が出て来ると気になる 2 割の子も上がってくる。それを一年間の見通しの中でやっていこうと。語弊があるかもしれませんが、私が北九州で持っていた子どもたちも 2 : 6 : 2 でした。いの町もそうだと思います。今日、初めて、伊野小学校の 1 年生から 6 年生まで授業を見せていただきました。これまでは学校を回って私が授業をさせていただくというパターンでしたが、率直な感想としまして、春から色んな学校の先生方にお話しさせていただいたことを熱心に取り組んで「いただいているなと思います。ただ、始まったばかりですから、手探りの状態でもありますし、先生方のやり方も当然有るわけですから、未だ十分に伝わってないなというところもあります。本当に全部見せていただいて、ここに着いて、「結構いけるかな」と、一年間の見通しの中で、行けそうかなと正直思っています。昨日の夜は、どうかなとも思ったけれど、そっちの方向に向いていこうとする先生方が多くて、今のところは正直いいかなと思っています。総花的にやったところで、コロッと変わるわけではないので見通しを持って、核になる人を見つけて、真ん中の人を動かして行って、かりかりしないでゆっくりと取り組んでいくといったスタンスを大事にしながらやっていこうかなという気持ちで居ます。あと、例えば乾先生には、お手数をおかけするかもしれませんが、こういう動きがあるんですよという全国の教職員に対する広報や、今後、一般の大人の方もこんなことが行われているんだからというように、町全体の中で空気を変えていって、先生方をジワリジワリと外からも変えていくような取り組みも必要なのかなと思っています。後、私自身の外に対しても筒井監督が今 PR ビデオを作っているのだから、そういうこともどんどん発信していただいて観ていただいて、いの町の教育だけでなく、教育そのものを全国に発信していく。内側と外側の両方を私自信もやっていきたいなと考えているところがございます。

岡村参事：事務局からの説明は以上です。

塩田町長：地方創生といった中で、一番の課題は人口減。それをするためには、仕事なんです。ただ、人口減、0 から 1 8、1 8 から 6 0、6 0 から最後まで。1 8 から 6 0 までの間が 4 千人出ていき 4 千人入っている。これが面白い現象。数字は減っていますよ。4 千人。0 から 1 8 が 2 千人減少、6 0 からがまた 2 千人減少。だから 4 千人減少。人口の流れはこんな状況。出生が欲しい。U ターンが欲しい、都会へ行っても帰ってきてほしい。根っこは仕事。その中で教育というものを放り込んだ。ここで保護者の方が、この教育方針に魅せられて、仕事そのものは、都会で仕事して子どもさんだけをいのにつれてきてもいい。本川の山村留学もそうですよね。ただ、本川のやり方と菊池先生のやり方は違う。人口構成は頭に入れておいて欲しい。

藤岡教育長：仕事の面で少しお伺いしたいのですが、4 月から始まった菊池学園が段々と全国に知れ渡ってきたかなと反応も自分の中で感じてきているところですが、その中で、

さて、仕事、我々教育委員会で相談されて方にお返しする場面で、能力も知識もない。そういったところでぜひ、町が一体となって取り組んでいくためには、その分野のコーディネーター役、窓口が必要。高知県に来たい、高知県で仕事がしたいと言う方のニーズにお応えできるのではないかなということをご検討いただきたい。それと先生にお伺いしたいのですが、まさに教育観を変えていただくための取り組みです。4、5月と来ていただいたわけですが、現場の先生方の新しい取り組み、これまでと違う取り組みに対しての負担感、率直なご意見をお聞きしたいです。

菊池教育特使：負担感。例えば、7時から10時までの寺子屋の負担感と授業の中での負担感、と2つがあると思います。寺子屋に関しては、元々そういう条件がありますから、来られている方は、10時というのは長すぎたかもしれないですけども、学びたいと思ってくださっている分、負担感というのは感じておられないのではないかと思います。来ない方は、それに負担感を感じて足を運ばれないんだろうと思います。じゃあ、勤務時間内の負担感、子どもとの関係性を大事にしていこうというのは、ある程度考えていることだろうから、負担感はあまりないと思うんですね。もう少し具体的に言うと、子どもたちが書いた成長ノートに、特にこのスタートの時期に書くということはそれぞれ負担感を感じる先生も居るとは思うんですけど、それによって関係性が良くなって、教室が良くなって楽しくなって、子どもたちが育っているというふうになる、例えば、1年後、そのご経験が無い先生は、その負担感を、新しいものも入ってきて感じているかもしれないですね。そのあたりは、実際に私がいなかった時に、乾先生とかが聞いてくださった方がいい、また有るんであれば、私もぜひお聞きしたいですね。

乾主監：私も学校を回ってとっていたんですが、回れていなくて、これから、それぞれの学校の様子や取り組みをお聞きして、速報的に流して町全体で取り組んでいきたい。せんせい方の思いを聞いて、菊池先生のアドバイスしていただく、現場のニーズ合った形で寺子屋を開催するという関わり方を考えていきたいと思います。

菊池教育特使：先日、伊野小学校からの質問というものをいただいて、先日返事を書かしていただいて、今日、とりあえず全学級を見せていただいたわけですから、返事を書こうと思っています。そうやって私自身も先生方と繋がっていかないと、例えば6月に学ぶ会を開催する。2か月に1回やる、或いは寺小屋をやるとなった時に、個々の足を運ぶ先生を増やして生きた。でも時間的な負担感みたいなものは、私はある程度、あってもいいと思うんです。それに賛同するような核になる先生を個別に見せていただいてから、お礼を書いて関係性を作りたい、そういう先生を増やしたい、そういう「先生が休日であっても時間が居であっても、よし、やってやろうじゃないか」という本物の2：6：2の2の部分を作って、少しずつ外掘りを埋めながら、先生方、勤務時間外だけでも、楽しいというふうに、これは必要だ、もっとやりたいと思うようになっていって、先生方も変わっていく。そういうふうになりたいという、大まかな考えを私は持っている。

岡村参事：一つ目の質問について、先ほど町長からも話がありましたが、いの町に呼び込むための取り組みである。仕事も住むところも含めてという話でした。現状、教育委員会でそれを探してきてくださいという気持ちは、もうとうございませぬし、今、創業支援ということで産業経済課で窓口を行っています。今後そういった部署でミーティングを情報共有して役割分担をする。現状あるのは、人員配置、臨時職、創業支援相談員、それと移住相談員、それともう一つ進化させていくといった事を、今想定していますので、こういったことで一本化できればいいなと思っています。仕事が、現状あるか無いか、と皆さん思われると思いますが、あるんです。選ばなければ小さい仕事はある。そんなものをまとめるといったところが無い状況なのかなと思う。ハローワークに出しても、人が来ない状況、人が欲しいが来ない。菊池学園をやるうえでは、メインとなるのは教員じゃないかなとは思いますが。そういったところの求人などはしっかりとやっていかなくてはならないと思っています。

山本委員長：お仕事の件、家の件は総務の方がしっかりとやってくれていて安心した。話を聞いていると、そういうものは総務課。では、起業したいというのは産経課。教育は教育。3つのセクションがくるくる回らないといけないというのではなく、一つのセクションに窓口をまとめる必要が早急にあるのではないかと、一箇所で処理ができるような体制にしなければ、いの町はせつかく新しいことに取り組んで居るのに水を差すようなことにならないかなという心配があります。それと、全体的に、教育委員会の中は、いの町まち・ひと・しごと総合戦略を今しないといつするのだというくらい、一番良いベストな状態だと思います。かつては、荒れた学校があったり、不祥事を起こした先生も居ました。最近はありません。それから小さいことを言えば、うちのいの町はエリアが広い。なかなか情報が行き届かない。それによる不平・不満、とにかく先生方の不満が多かったように思う。最近は多少のことは除いて内容に思う。幸いなことに水の事故・生徒間の事故もない。一番、菊池先生をお迎えして事業を始める皿ができていてベストな時期ではないかと思う。

菊池教育特使：一つ、私の教育に関する事だけになるんですが、やっぱり核となる先生方を一人でもたくさん創り出したい。何が言いたいかと言いますと、教育委員さんとか管理職の先生方が「お前、行ってこい。」というような、教員にやる気のある先生が居ると思うので、声をかけていただいて、そういう場所に休日、夜間の寺子屋に足を運んでいただけるような、いい意味での一本釣りですよね、それらを働きかけていただいたら嬉しいなというのが正直な気持ちです。

塩田町長：菊池先生に、教育長が失礼な質問をしました。

菊池教育特使：これは議会にも出ていたんですよね。それは聴いておりましたので、当然そこはポイントになると思うんですよね。観が変わり、成果が出ると、負担感は無くなると思うんです。だから、言ってみりゃ負担感を感じないで済むようになるために先生方は出てきている、同時に負担感に蓋をして、何も変わりたくないという先生方もいる

と思うんです。ですから、そういうのが少しづつ見えてきた時点でトップの2を創るがゆえに、トップダウンでやっても、僕は全国色んな所にお邪魔させていただいて言うんですね、教育委員会の皆さん、或いは教育委員の皆さん、或いは管理職の皆さんは、やっぱりいい意味の改革を望まれている勢いがあると思うので、私はトップダウンと言いましたけれども、これはプラスに働くんじゃないかなと、プラスに働かせていくための核となる先生を一人でも二人でも増やしていきたい。

塩田町長：2：6：2の6と2をうまくシフトする。そのことによって軽くなるんですね。そういう意味合いで答弁はしました。それを、もう少しストレートにパンと言えないかなという質問だったと思います。自分たちのやっていることを分解させられたくないといった意味もあると思う。

菊池教育特使：教員がサラリーマン化している傾向もある。元々熱心な先生を、まず、たくさん創るとというのが私は大切だと思う。

塩田町長：話を聞いていると分かるのですが、子どもさんを変えるのではなく、まずは先生を変える。先生が変われば子どもさんも変わる。産経、教育、総務バラバラであるが、といった質問もあった。いの町はワンストップというシステムもあるし、来ていただいたら2階と3階が一つに集まってワンルームで話をするようにしますので。それとどうですか。教育委員会として、トップダウンというのはやりにくいんじゃないですか。

渡辺委員：状況に依りますね。問題の中身によって臨機応変にやっていかなければならない。大丈夫だと思う。総合的な立場で、これは絶対に成功させなければならないと思いますし、行けると思います。まだ生みの苦しみではないか。現場の教員たちの不満は私もポツポツ聞いたりもするけれど、今新学期のむちゃくちゃ忙しいときですよ、その中でどれだけ食らいついてくれるかということを目を注いでいた。最初に乾先生がずっと学校を回っていく時に、吾北ですが、教員がどう反応するかなあと私も付いて回ったけれど、総じてすごくいいスタートは切ったなあと、ただ、寺子屋も含めて一気にフィーバーするかというと、そういう状況ではない、まだまだ生みの苦しみだと。焦らず粘りつつで行けるんじゃないかと思います。

山本委員長：私は軸になる人を作りたい、焦る気持ちはよく分かるけれど、いいムードが出始めたから、トップダウンという言葉は使わずにムード作りから始める時期じゃないかなと思います。菊池先生がトップダウンのような形で、もっと人数的な効果を希望されてるのかなと思う。今、こんないい事業をしているのに参加者が少ないという不満の表れかなと思いますけれど。質問したいと思います。先生方にこんな新しいこととしてますよ。いいことありますよというムードで、もう少しこの1学期を押し進めていったらいいと思います。それから、このパンフレットにある5ページの中の、子どものほめ方・叱り方、これは教師塾だから教師だけですよ。これは、PTA版のようなものができたらいいのでは。

塩田町長：一気に先生に負荷をかけるのではなく、まず先生を変えていく、当然変えなけ

ればいけないわけですから、これはもう少し時間をかけましょう。まずは、学校に居る時間帯でやっていく、そして2段階でやっていく。トップダウンという話ではなかなかやっていけない。例えば、私が職員にトップダウンで内閣府に行ってきたさいという。それで地方創生をやることになる、それで本人がやる気になってまとまる。こういうトップダウンが必要な時もある。ただ全部トップダウンがいいということではなく、やる気がある方に対してのトップダウンは、私は効果があると思う。

山本委員長：私も確かに両方がその気になったら、すごく早い。その時期はあるけれど、今としては少し早くないですか。1学期は現場の先生方は学校訪問もあり、行事もあり、ちょっと今は、もっと優しいものはいかがでしょうという提案です。

塩田町長：分かりました。そいった考え方もございますでしょう。やはりトップダウンは先生全員に行けと言ってるわけではない。そういう先生からスタートさせる。そこは学校に任せなければならない。教育としては日程組むのが筋ではないか。

山本委員長：そこは教師も2：6：2が当てはまるかな。2はやはり寺子屋に来ている。そこは現場現場ですよ。学校により、すぐにトップダウンでやったらいいという学校もあるでしょうし、1年かけてじっくりやったらいいよという学校もあると思いますので、そこら辺りは乾先生あるいは菊池先生が管理職と相談したうえで進むべきかなと思う。

渡辺委員：私が常々言っているのですが、教員の研修というのは教員のやる意欲に非常に左右されると思いますので、そこをどう引き出すのかという点だとは思っている。私が思うのは、菊池先生の本を読めば、普通の教師はみな燃えるんですよ。燃えない教師はほとんどダメな教師で、これはいいとか菊池先生の授業を見たら、目からうろこにほとんどの教師になるはず。そこでどう自分が変わって踏む出していくのかということになればいいわけですが。私が一番心配して、いつも委員会でも発言しているのは、先生方がそういうふうに踏み出せる状況を私たちが確保せないかん。つまり何を言いたいかというと、現場はそれどころじゃないという殺人的な忙しさが日々続いていると、寺子屋どころじゃない、ましてや教員の意見を聞いてみたら、新しい成長ノートが来たけれど、それがまた一つ子どもたちとやり取りしてやらなくてはならなくなる、大事見たいな窮地で戸惑っている現場がありますね。たとえば、7時に出勤して夜帰ってくるのが7・8・9時ということ、これはたまにはいいのですが、日常化している、かなりのウェイトで多くの人が日々忙しさに明け暮れている。ましてや若い教員たちは子育てしているのですから、むちゃくちゃ大変なわけですね。仕事で例を挙げると、私の息子と嫁が小学校の教員で、嫁は枝川小学校の教員なんです。子どもを4人育てている。6・5・1年生、幼稚園男の子ばかり4人を育てながら二人で小学校の教員をやっている。私の家内が土日以外はほとんど向こうへ行っただけで嫁を助けている。7・8・9時になるというのが連日なんです。助けてやらねばあの家庭は成り立たない。なんでそんなに忙しいのかと嫁と話すのですが、一生懸命やっているわけです。嫁だけではなくて

んな教員がそうだろうと思うのですが、今、教育界が非常に忙しい。これは世界一忙しい。日本の教員は忙しい。もちろん高知の教員も忙しい。ただ、菊池先生の勉強をしたら無駄な忙しさからかなり解放されるという展望が見えてくるんですね。教員の忙しさの原因はいっぱいあるんですけど、子どもとの関わりでたれもつれて忙しい。子どもたちが生き生きとやってくれれば、そういう忙しさはかなり違う。親との関わりで忙しい、その他行政からたくさん来る雑用に忙しいという人もいる。原因が単純でないから非常に難しい。そういう現場の状況に委員会としては寄り添いながら励ましもし、できる改善は我々も努力し、その一つの大きな光として菊池学園を迎えた、というように私は捉えている。だから、必ず乗り越えるべき課題だと思っています。

塩田町長：教育委員会、雑用を減らしてください。

山本委員長：いや、それは教育長に言っても無理だと思います。

塩田町長：では事務局に。

山本委員長：いやいや、教育委員会が仕事増やしたりしていません。

塩田町長：はい、分かりました。

乾主監：事務局から一つ、保護者ですが、PTA の講演会も依頼しておりますので。それと菊池学園の取り組みの中に大人版菊池学級というのがあります。町民対象の講演ということで、今年は11月29日に町民講座を計画しているところです。そういうまずは学校現場をメインに実施して行って徐々に広げて行って、もうすでに寺子屋の方にも一般の方の参加というのもあったので、広めていきたいと考えています。

岡村参事：時間が過ぎておりますが、山中委員、日向委員、何かありませんか。

日向委員：昨日から、学校訪問が始まりましたが、去年とは違うなど、今、いの町が菊池学園を始めたんだよということも入れながら、先生方の授業の様子も観察して言うことを我々がしなければならぬ。繋がっているんだということをお話いただければ、本物になるんだ。で、本物じゃなくてもいいんですよ。

岡村参事：それでは大体の意見が出て、有意義な会になったのではないかと考えておりますが、その他はないでしょうか。それでは、これをもちまして、会議を終了いたします。